

『ペルー ラ・モリーナ国立農業大学 世界展開力強化事業留学帰国報告』
国際食料情報学部 国際農業開発学科 4年 西岡 桂

私は昨年8月から南米ペルーの首都リマにあるラ・モリーナ国立農業大学へ1年間留学していました。留学を志望した理由は、同じく昨年の2月に短期で2週間行った際にこの国のことをもっと知りたいと思ったからです。また、最近話題の「スーパーフード」の多くがペルーから輸出されており、有用植物を利用した商売が活発になってきました。将来ペルーに対する期待の他、特有の地形で見られる自然や文化の違いを見てみたいと思い、大学生活の一年間をこの留学に捧げる決意をしました。

さていよいよ出発の日、涙をこらえきれず家族と友人に見送られていきました。夜中にホルヘ・チャベス空港へ到着し、農大にも来たことのある私の留学担当者がお迎えに来る予定でした。到着後彼が見当たらずネットも繋がらなかったのととりあえず両替を済ませて短期で留学する後輩たちと合流しました（同日着）。友人が遅刻してきましたが、早速ペルーらしさを体験しました。到着し、翌日には新居へ移り、生活に必要なものを買いました。これは以前短期で日本に来た友人とそのご家族が手伝ってくれました。その翌日から授業が始まりましたが、スペイン語が全くわからない状態でいきなり各授業に座らせられ英語を喋る人に助けをもらいながら受けていました。最初の数週間は毎日疲れていて、食べることより寝ることを優先する日々でした。初めて親元を離れ、国外で一人暮らしかつ言語がわからないことが苦しかったです。

住宅は大家の家に付属している屋上の小屋で暮らしました。ベッドがあると聞いていたのが何もなく、家具はソファベッド、棚、机椅子、冷蔵庫を買いました。着いた頃は予想以上の寒さで体調をよく崩していました。新築でしたが締めきらない窓とドアからすきま風が入ってきて、当時はドライヤーもなかったので防寒具を着て凍えながら寝ていました。OGのセシリアさんがタクシーで毛布を送ってくださり助かりました。夏場は直射日光が屋上に照らしつけ、家を出て涼しいところを探しました。隣接している倉庫とタンクに工事の人や大家さんが頻繁に来て、窓を開けて寝ていたときはびっくりしました。門の内側から鍵をかけていたのですが、大家さんにかけるなど言われこうやって自由に出入り出来るようになってしまいました。生活は砂埃の掃除と毎日の食料の確保と手洗いの洗濯が大変でしたが、少しずつ慣れていきました。食べ物の保存が難しく、いろんなものを腐らせてしまいました。歩いて15分のところにスーパーがあり、パンや野菜・果物はとても安かったのでよく買いました。一時期はストレスもあって1食しか食べない時がありました。実家暮らしのありがたさを痛感しました。慣れてきた頃には、外食もたくさんしていました。ペルー料理は美味しいと聞いていましたが、本当に美味しいです。日本食も恋しくなりましたが、ペルー料理の美味しさを知ってから日本食は作らなくなりました。基本的に料理は、前菜のサラダ・スープとメイン料理です。私は特にスープが好きでした。ハーブや香辛料をふんだんに使ったスープは飲んだあと体が温まります。主食はご飯もしくはフライドポテトです。お米はにんにくと塩で炒ってから炊くので、味がしっかり付いていま

す。魚はスープや焼き魚もあれば生魚をレモンで締める有名なセビーチェがあります。肉料理はモルモットやたまにアルパカが山脈地帯で食べられます。鳥を釜でじっくり丸焼きしたポーヨ・ア・ラ・ブラッサは祝い事から普段のテイクアウトまで国民に幅広く愛されている料理です。他にも外ではあまり見かけないペルーの家庭料理は野菜がたっぷり使われていてとても美味しいです。道端で売っている食べ物も安いし、小腹が減った時に最適です。

元々窓の薄さやドア一枚なのが気になっていたのもあって4月に引っ越しました。家賃は倍の値段で、快適でしたが工事のミスで屋根が落ちてき、他にもコンクリート液やレンガが降ってくるのは困りました。とことん家には運がなかったのだと振り返ります。この経験を活かして家選びには慎重になります。

交通手段はバスが主流です。バス停でどのバスが何分置きにくるのか1時間半観察していました。リマは渋滞がとてもひどいので時刻表なんてものは存在しないのです。結果、「待てばいつかは来る。来なければタクシー。」とペルースタイルを習得しました。初めてひとりで遠くへ行こうとしたときは迷子になってしまい、日も暮れていたので断念してタクシーで行きました。知らないおじさんが助けてくれて、値段も交渉してくれました。タクシーは乗る前に行き先を言い、値段交渉をします。納得いかなかったら次のタクシーを捕まえるのです。初めて交渉が成立した時は嬉しかったです。外国人だと気づかれるとかなり値段を上乗せされます。タクシーは危ないから乗るなどと言われてきましたが、自分の行き先から変な方向に行っていないか地図でチェックしながら乗りました。タクシーは複数人であればバスとあまり変わらない値段で乗れます。バスは特に注意していました。荷物は絶対抱えてものの出し入れはしませんでした。滞在中盗難現場はしばしば見かけていましたが、一度グループ犯行によるバスジャックに乗り合わせ、日本で平和慣れしていたのが引き締まりました。特に外国人だと気づかれると盗難のリスクやぼったくりなど不便なこともあったので、肌を焼いて身だしなみも現地に合わせる工夫をしました。普段のバスは混んでいる時間帯でなければ、物売りや歌を歌ったりする人が乗車してきてたまにチップをあげます。特に子供がやっているときはあげていました。ペルーでは道端で子供や老人がお菓子を売っていることがいろんなところで見られます。お店に入ってきてテーブルを回っていく人も珍しくありません。

大学では、到着二週間で担当の人が辞職してしまい動揺しました。その友人はとてもよくしてくれていたし困ったときは彼が英語も通じるので一番頼っていました。それもあって事務的な部分で大学とのすれ違いが余計あったのかかもしれません。後期は履修登録がされておらず、現地の国際協力センターにそのまま授業出席しておけばやってくれる話でしたが授業へ行くと先生方が口揃えて定員オーバーだし話を聞いていないと言われました。結局自分で事務手続きをしましたが、今度は保険を払わないと正式に登録されないとあとから聞かされました。今となるともうなんでもよかったなって思えますが。単位は帰国後でも間に合うので、こちらの学生生活を楽しみながら現地を知っていこうと思いました。

さて、大学では初めて自分の畑を持ち、土地を耕すところから始まりました。炎天下の中汗だくで重いスコップを駆使しました。播種から収穫まで初めて体験し、小さな土地でしたが農業の大変さを学びました。収穫した野菜は大学に買い取ってもらうか、友人にあげてペルー料理を作ってもらいました。毎日雑草を取りに行き、旅行で日が開いてしまったときは大変でした。他の授業では果物について、特にペルーの果物で知らないものがあった興味深かったです。熱帯作物の授業ではコーヒーの木の世話やパイナップル工場の見学へ行きました。また、ジャングルにいる民族についても学びました。アマゾンへ行く機会だったのですが、友達ができなくてどうしても行く気になれなかったです。ラ・モリーナ大学は学外実習が多い大学で、友達の実習について行った時はパイナップル、コーヒー、ピタヤの畑を視察しました。ジャングルにある大学宿泊地まで真夜中に2時間山の中をひたすら歩いたのは今でも忘れません。後に虫採集で何回か行きました。ペルーならではのどれも珍しく大きな虫ばかりで楽しかったです。

短期で留学した際にOGの方が果物市場を案内してくださり、見たこともないペルーの果物を味見してまわりました。その時にグラナディージャ(*passiflora ligularis*)という甘くて美味しい果物を知りました。その果物が将来日本でも食べられたらいいなと思い、グラナディージャについて知るのも目的の一つでした。そのため大学の図書館で資料をコピーする作業がしばらくありました。同じ日本人留学生でもすぐに図書カードを発行してもらった二人の友人たちとは違い、私は申請から発行まで2ヶ月かかりました。担当の先生が出張の多い人で返信がなかったりしました。その先生は私とは必要以上に関わろうとしない人でした。滞在中顔を合わせたのも3回くらいで、帰国間近になって私の連絡先を持っているのにも関わらず友人を通して連絡してきました。内容は、帰国はいつなのかと、帰る前に私の留學生活について何も知らないから話を聞かせて欲しいということでした。今更会う必要もないと思うので、御礼と断りのメールを入れたら返事は来ませんでした。こういうのは両校の関係の問題なので私はどうしようもなかったのですが。

留學中の一番の苦勞は寂しさと友人との付き合いです。ご飯を食べる相手がいないさみしさや家に帰っても一人なのが嫌で研究室にこもったりしていました。研究室の職員は優しくかったです。みんな私のスペイン語の練習に付き合ってくれました。留學生仲間も最初はいなかったのですが、そこから農工大から二人と北見工業大から一人院生がやってきました。彼らは毎日実験で忙しそうでしたが時間が合うときは一緒に夕飯を食べたり出かけたりして心の救いになりました。彼らがいた5ヶ月間はお互い助け合ってお世話になりました。一緒に旅行へも行きました。日本に置き換えて考えてみたら、寮もなく、留學生の交流がなく、クラス制でもなく、一年間だけ滞在であればずっと面倒を見てくれる人などいないのは当たり前だと感じました。私も親元を離れて暮らすのは初めてだったので、いろいろうまくいかず辛い思いをすることもありましたが、これも留學のおかげで少し強くなれたと思うので良かったです。授業では自分から助けを求めることができず、安心して頼れる友人ができませんでした。踊りやお酒が苦手の後半期はパーティーに参加するのを

やめてしまい、仲を深める場を避けてしまいました。文化としては知れたけど、きつともっと積極的に参加していれば交友関係も広まったのだと振り返ります。学内では主に挨拶して立ち話する程度の友達ばかりでした。スペイン語がもっとできたら本来の素の気持ちで話せていたし、なかなか意思疎通が難しかったです。私の場合、英語はできれば話したくないと言っていたのですが、時間が経つと喋られないストレスで、自分で自分の首を絞めてしまいました。

そんな中、私の居場所はバスケットコートでした。能力や学部問わず、ただバスケットをしたい人が集まって暗くなるまでやっていました。女の人はほとんどいなかったけれど、気軽に喋られる友達がいるだけで心の支えでした。どこへ行ってもスポーツで繋がれることを実感しました。また、全校大会は来て一ヶ月もしないまま飛び入り参加をし、みんなに名前を覚えてもらうことができました。その後の学部内対抗でも全て優勝できました。学部対抗バスケットでの活躍をきっかけに大学の選抜チームにも入れてもらえ、良い仲間ができました。コーチの誘いでインターカレッジのバスケットチームにも所属し、その中でとても仲良くなれた友達がいて今でも連絡を取っています。学外でも住宅地のコートに通い多くの友人に恵まれました。学内にとらわれず、いろんな学生や同年代の人と話をしてペルーのいろんな面が見られました。バスケットの奨学金で大学に通えるはずが怪我で剥奪され、大学へ通えず不安を抱えている友人もいれば、大学を中退し自分で起業した人もいます。ベネズエラからの出稼ぎで家族が離ればなれになっている人もいました。彼らと出会うまではベネズエラ情勢についてなにも知らずショックでした。若い女の子の妊婦さんがいたので年齢を聞いたら14歳だと言いました。ペルーでは未成年の妊娠がとても多く、墮胎することはカトリック宗教上禁止されています。バスケット仲間にも十代の父親が何人かいます。

ペルーの教育はお金を出せばいい教育を受けられるそうです。大学の入学前に皆予備校へ通います。3月と9月入学で何回か試験は受けられますが、ラ・モリーナ大学は人気で浪人する人が多いです。ただでさえ5年制の大学でかつ浪人や留年をすると、卒業時には25歳以上です。現に友人たちは24、5歳が多かったです。時間をかけてでも卒業しなければいい仕事ができないそうです。ラ・モリーナ大学は授業を受ける生徒が定員制で取りたい授業を取れない人もいます。特に森林学科は授業待ちで平均7年は卒業するのにかかると言っていました。卒業が遅れることは日本ではとても気にするので気楽でいいなとは思いますが、さすがに授業待ちで遅れるというのは少し疑問です。

さて、バスケットと同じくらい好きだったのは旅行です。元々海外旅行が好きで、ペルーの中でも積極的に行きました。初めての旅行は砂漠のオアシスであるワカチナとバジェスタ島へ行きました。ワカチナではサンドボードや高い場所が苦手だけど頑張って登った砂山で美しい夕日を眺めました。夜は気温も下がり砂風が痛かったのですが、ワカチナの夜景は本当に美しかったです。ペルーの好きなのところは海岸、山岳、熱帯地帯の三種類を同じ国で体験できることです。山岳地帯はのどかな緑を想像していましたが、何千メートルという想像をはるかに超えた山々でした。高山病になった時は一秒が過ぎるのも辛いです。

5500メートルが私の最高記録で、今後これを超えていこうとも思いません。ただその時の景色は一生忘れられません。三つの区分のうち最も好きなのがジャングルです。汗をかいて美しい虫や動物を探すのが楽しかったです。中でも両手くらいの大きさの青い蝶は私の憧れです。いつか自分で標本を作りたいです。謎のアリが上から大量に降ってきて噛まれて激痛だったのも今ではいい思い出です。未だに傷は消えていません。あとは蚊に刺されると風船みたいに腫れてしまい毎回そこだけは避けられませんでした。夜の星がとても綺麗なのですが、ペルー人はあまり空に関心がないのかこれが当たり前なのか、一緒に感動してくれる人はいませんでした。旅の終わりにはリマに戻って安心したいと思えるほど環境には慣れました。

家も引越し、ボロボロのミニバスで移動もできます。タクシーの値切りもできるようになりました。本当に生活していくための最低限のことですが、怖くて出歩けなかった日々と比べると成長したなと思います。当初はパンの量り売りも怖くてできませんでした。毎日少しでもいいから一歩踏めたなって思えばその日は合格だと考えるようになりました。疲れて週末は家に籠って勉強やインターネットをし、一言も喋らない日もありました。何をしたらいいかわからなくなかったのです。なにかやるにも気力がなく、どうにかしなくてはと思うものの気づいたらもう暗くなって、を繰り返しました。少しずつ慣れてきて、外へ連れ出してくれる人が見つかり、ペルーは怖いイメージがあったのですがとても豊かな国だと気づかせてくれました。一部の人柄は短気で横着でしたが、外国人の私にとっても良くしてくれる人がほとんどでした。そして彼らは私を強くしてくれたと思います。殻にこもっていたらこの国ではなにも通用しない、言いたいことがあるならはっきり言え。貧しくても楽しそうに生きる人びとや何年かかっても大学を卒業したいという思い。むしろ自分はこの年齢でもう大学を卒業できることがすごく恵まれているのだと知りました。人生まだ長い、好きなことを自分のペースでできる幸せを感じました。私も日本の社会に恐れず、しっかり自分の気持ちを大事にしていきたいと思いました。

最後に一年間という長かったようで短かった留学は、浮き沈みの激しい毎日でしたが、生涯忘れることのない思い出と人々に出会えました。精神面、金銭面で支えになってくれた家族、落ち込んだ時話を聞いてくれた友人達。頻繁に相談や美味しいものを食べに連れて行ってくださった卒業生の鈴木さん。声をかけて心配してくださったセシリアさん。そして先生並びに職員の皆様に感謝申し上げます。残りわずかの学生生活を頑張っていこうと思います。